

「ものづくり万事承ります」 古川電気工業株式会社 (FeIT)

COLMINAの活動を通して出会った、魅力的な企業をご紹介します。

今回は、コンピュータ部品や産業機器のメーカーから、ものづくりの総合コンサルティング会社へと変貌中の古川電気工業株式会社（以下、英語名のFeIT<フェイト>）＝横浜市港北区＝をご紹介します。主にお話を伺ったのは社長の古川智健さん。外国勢台頭で国内のものづくりが縮小傾向にある中、古川さんが挑戦中の拡大戦略とは？



強みは「1941」「1」「3」

FeITは横浜市郊外部に2階含み約300㎡の工場があり、約20人が働いています。ちなみに、昨年10月から使用している「FeIT」は、単に英語社名の略というだけでなく、Feには鉄の元素記号も含意。全体で鉄とITをつなぐ会社という意味もあるそうです。

同社には提供サービスの強みを象徴する3つの数字があります。「1941」「1」「3」です。

まず1941は、太平洋戦争開戦直前の1941（昭和16）年8月の創業を指します。2021年に創業80周年を迎える長年の精密部品加工事業での豊富な経験と、その間に築き上げてきた取引先企業との信頼関係、実績が大きな財産となっています。

1は「ワンストップショッピング」です。職人さんだけの町工場や卸売業者、商社などと構築してきたネットワークがあるため、発注者は「複数の工場から部品を取り寄せて組み立てるのは面倒」などの不満を解消できます。FeITは自社工場もあるので、板金からプレス、切削、表面処理、組み立てまで、何でも一括受注が可能です。

3は「最短3日」の納品です。「100分台の寸法で表面処理を含む金属の切削部品などでの実績」（古川さん）とのこと。国内外への配送経験が豊富で、首都圏内なら自前で納品も可能だそうです。古川さんは「今、見積もりは5日以内、納品は15日以内が目標」と話します。

スピード重視は米国での体験から

このスピード重視の考え方は、古川さんの米国勤務の体験から来ています。米国留学してMBA（経営学修士）取得後、メキシコ国境近くにある基板実装や搬送設備を扱う商社で3年間、事務・経理の仕事をしました。この時、「受注後すぐに工場を稼働させて納品するまでの早さに驚いた」そうです。

同時に、「リーマンショック後の内向きだった日本を外から見ること、まだまだやれる事はある、と希望をもって帰国できた」と語ります。

「顧客満足度を大切にしたい」

製造業界では、生産管理上、「QCD」が重視されてきました。品質（quality）、コスト（cost）と納期（delivery）です。古川さんはD偏重ではなく、Qにも重きを置いています。「製品に不具合が出て、お客様の生産ラインを止めてしまった」苦い経験があるからだそうです。

逆に「大手ガスメーカーの検査装置に試作段階から関わり、プロトタイプができた時には、関係者みんなの一体感がすごく良かったなあ、と。とてもやりがいを感じました。QCDをしっかり守ることが顧客満足度につながると思うので、そこを大切にしたいと常々思っています」と力を込めます。



お話を伺った、古川 智健 社長

長年掛けて築いてきた約140社との協力関係強化

創業者は古川さんの祖父 金松（きんまつ）さんです。東京都品川区内に古川電気研究所を設立し、着火ライターの板金部品を製造。戦時中は群馬県へ疎開し、当時最先端の溶接・曲げ技術を要した海底探査に使われるソナーの板金筐体を製作していたとのこと。

最も苦しんだのは敗戦直後。受注自体が少なく、あっても低単価のものが多かったそうです。経済復興期にはNECの下請け企業として品川、大田区に工場、岩手県一関市に営業所を所有。電話交換機のサーバーなどの板金部品製造やファクス開発に携わっていました。

1990年代に入ってから横浜市鶴見区にプレス工場を開き、NECノートPCの指定工場としてシャーシを製作。2000年代にはアミューズメント機器の液晶パネルの樹脂部品を作ってきました。110tプレス機械を改造し、従来は切削でつくっていたものをプレスで一気に樹脂を抜く技術も完成させたとのこと。17年に、協力会社の集まる同市港北区に拠点を集約。技術力のある約140社との協力関係を強化しながら半導体設備の筐体組み立て、米国向け電気自動車製造ロボットの部品製造に取り組んでいます。

少量多品種生産に重心移す

現在の主力業務は試作、部品調達と設計・開発支援です。

従来、大量生産の部品加工が中心でしたが、今は少量多品種生産に重心を移しています。転機となったのは「人件費の安い中国や東南アジアなどへ生産拠点が広がったこと。もう一つは、私が大手ガスメーカー向け検査装置の設計から組み立てまでに携わった経験から、部品製造の上流に当たるアイデア、設計段階から関わることがものづくりの醍醐味と感じたこと」と古川さんは話します。

お困り事は「お引き受けします」

そうした流れから、新しい会社パンフレットの表紙には「ものづくりのコンサルティング会社」との言葉が印刷されました。製品を世に出すだけの会社からの脱皮を図っているのです。

特に、スタートアップ（新興）企業への支援に注力しています。きっかけは一昨年のシリコンバレーへの見学ツアーだったそうです。

「元々はNECさんの下請けで特定企業との取り引きが多かったのですが、海外や国内のいろいろな業種との取り引きを少しでも多く、と考えていました。シリコンバレーでは、人のライフスタイルを変えてしまう技術革新を日々考えている様を見ました。インキュベーション（新規事業創出支援・成長促進）施設やベンチャーキャピタル（有望事業への投資企業）などスタートアップ企業を育てる環境がそろっているんだな、と感心もしました。それで、新規事業を開拓する上でスタートアップ企業と仕事をするのも面白いなと思ったんです」

どういった関わり方を考えていますか？ 「これまでに聞いたところでは、スタートアップ企業は、アイデアはあるけれど、どうやって形にしたらいいのか全く分からないし、どこに頼んだらいいのかが一番分からないとのことでした。私どもはその窓口役・ハブ（中継）役になれたらいいなと考えています」

その役割を果たしている先輩企業には、深海探査機「江戸っ子1号」開発に参画したことで知られる東京都墨田区の浜野製作所があります。「町工場でもできることってあるんだと教えてくれました。憧れ、尊敬の眼差しで見ている会社。うちでも同じようなことをしたいです」

現在、FelTは一般社団法人環境共創イニシアチブ（SII）の「スタートアップ・ファクトリー」にも名を連ねています。経済産業省が、ハードウェアなどの独自製品の量産に挑むスタートアップ企業を支援する経済政策パッケージ「J-Startup」を2018年に始めました。これには、スタートアップ企業が製品量産化に向かう際に立ちふさがる「壁」（＝多額の資金と独自ノウハウ）を低くしよう、という狙いがあります。

この政策を受けて、SIIがスタートアップ企業の支援拠点となる「スタートアップ・ファクトリー」を選んで後押ししているのです。FelTはその一つに選ばれ、「助成金で設備導入をしました」と古川さん。

金属感残しつつ和紙の柔らかさのあるPCケース

異業種とのコラボ実績もあります。例えば、FelTとは無縁に見える和紙工芸会社とのタッグでつくったパソコンケースです。神奈川県愛川町には「海底紙（おぞこがみ）」という伝統の手すき和紙があります。その海底紙を木材など各種素材でできた土台に貼り、ウレタン樹脂を塗布した「愛川和紙細工」を考案した同町内の「芳雅美術工芸」の米田（よねた）博行さんに、FelTの新人セールスコンサルタント・戌亥（いぬい）S.ゼーンさんが提案して実現したそうです。

和紙の柔らかさの中に金属の硬い感じが残る、唯一無二の見え目です。戌亥さんは「（髪の毛のように微細な線）『ヘアライン』を金属表面に刻み、それが透けて見えるように、貼る和紙を極薄にすることで光を反射させる工夫をしました」と教えてくれました。このPCケースは「"プラスα"の提案型モノづくり」がテーマの専門展示会「ものづくりマッチングJapan2018」（日刊工業新聞社主催）に出展して大いに注目されました。



和紙技術と金属加工技術が融合したPCケース 左が茂彦さん

最後に、同じものづくりに携わる人たちへのメッセージを。

「例えば、女性が夜道を歩いていて人影があり不安になった時、それを握れば携帯電話の着信音が鳴るデバイスを、あるベンチャー企業がイベントに展示していました。そういう、人の役に立ち、喜んだり共感したりしてもらえるものを一緒につくっていきたいと思います」



(ロゴをクリックすると、企業のホームページが開きます)

現在は、プラスチック加工が得意でロボットの設計、組み立てをする東京都青梅市内の南デザイン株式会社との協業で、歩行ロボット、警備用ロボットを作っているそうです。

「世に無いものを」

古川さんは今の日本のものづくりをどう見ているのでしょうか？

「日本には経済復興期のトヨタやソニーを支えてきた技術力を持った会社が多く存在し、最近では「スタートアップ・ファクトリー」の様な官民一体となれる仕組みも増えてきました。今後は日本のものづくりで国内外の人々の暮らしをより豊かにするような製品が生まれる嬉しいです」



さまざまな加工には職人技が不可欠